

海事観光の取組み

海事観光の推進による観光先進国に向け、官民一体で「海事観光推進協議会」を令和元年6月に設置。同年10月には具体的な施策推進のため、「海事観光推進協議会ワーキンググループ」を設置するなど積極的に取組んできた、海事観光の事例をご紹介します。

特集

海事観光

旅客船の利用促進に向けて～航路情報のオープンデータ化の推進～

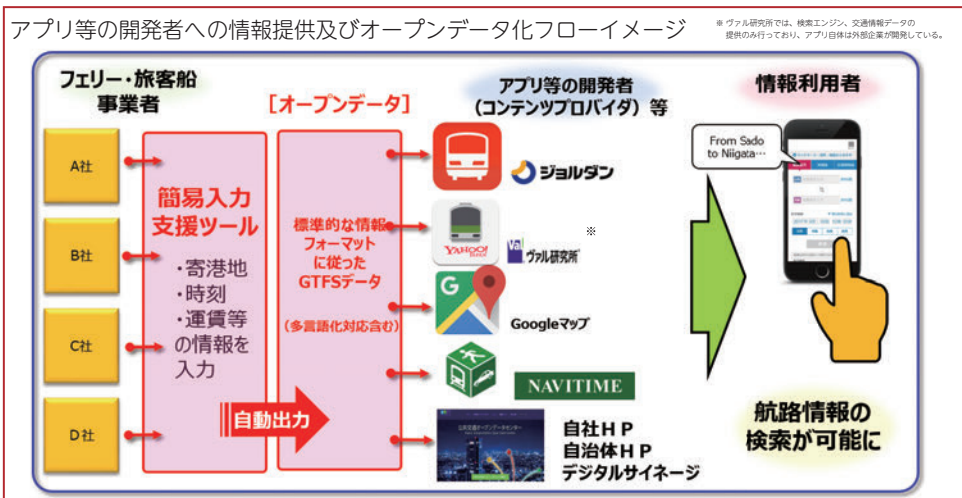
旅行先や交通手段を選ぶ際、地図アプリや乗換案内を利用する方は多いのではないのでしょうか。陸上の交通手段に比べて、旅客船の航路はまだまだ地図アプリや乗換案内に出てこないものも多く、海事観光の推進に向けた課題のひとつになっています。

そこで国土交通省では、経路情報の充実を図るべく、航路情報のオープンデータ化を推進しており、航路事業者の方々が簡単にGTFSデータを作成できるよう、「標準的なフェリー・旅客船航路情報フォーマット」、「簡易入力支援ツール」を作成し、ウェブサイトにて無料で公開しています。

オープンデータ化の推進により、地図アプリや乗換案内への航路情報の掲載が増加することで、航路の認知度の向上、観光客等による航路の利用増加に大きく弾みがつくと期待されます。

GTFS (General Transit Feed Specification) とは？

公共交通機関の時刻表と地理的情報に関するオープンフォーマットのこと。アプリ等の開発者は、地図アプリや乗換案内に、このデータを利用します。



「航路情報のオープンデータ化の推進について」より詳しい情報はこちらから！
「標準的なフェリー・旅客船航路情報フォーマット」、「簡易入力支援ツール」のダウンロード、入力解説動画を見ることができます。

https://www.mlit.go.jp/maritime/maritime_tk3_000070.html



アクセスQRコード

フォーマットが表彰されました！～「勝手表彰」受賞～

「標準的なフェリー・旅客船航路情報フォーマット」が、一般社団法人オープン&ビッグデータ活用・地方創生推進機構 (VLED) より、オープンデータに関する優れた取組みとして、2019年度「勝手表彰」(スポンサー賞)を受賞しました。

より多くの航路事業者に利用していただくため、「フォーマット」、「支援ツール」の使い勝手に一層の磨きをかけていくとともに、その周知に取り組んでいきます。



いつもはまじめな課長 (中央) もちょっと嬉しそう!?

瀬戸内しまたびライン観光開発プロジェクト

(瀬戸内シーライン(株)、西日本旅客鉄道(株)、(株)JR西日本コミュニケーションズ)

ニューヨークタイムズ紙に「2019年に行くべき観光地」に日本で唯一ランクインするほど美しい景観を持つ瀬戸内エリア。ここに、首都圏・近畿圏等からの往復新幹線とクルーズを組み合わせた周遊ルートと観光コンテンツの開発を企画する「せとうちパレットプロジェクト」が2018年度初めに発足しました。

当地では、点在している観光地間を結ぶ周遊ルートが不十分であったことから環境改善のため観光型高速クルーザー「シースピカ」の建造に着手し、2020年7月6日進水式を行いました。

広島港でのお披露目式(8/20)を経て、9月から本格運航します。往路は列車・復路は船といった周遊旅行が組め、島々に立ち寄りながら、海からの景色も堪能できるのが特徴です。2Fデッキで感じるオープンエアやサイクリングとの組み合わせなど、健康的で魅力的な海事観光コンテンツとしての注目も期待しています。

■観光型高速クルーザー「シースピカ」
全長25.7m 全幅6.8m 1F座席定員90名(2Fはデッキ「スピカテラス」)
(独)鉄道建設・運輸施設整備支援機構(JRTT)が、2018年に創設した「国内クルーズ向けの船舶共有建造制度」を活用した初めてのケース。



▲シースピカ アンバサダー「STU48」メンバー出席の進水式



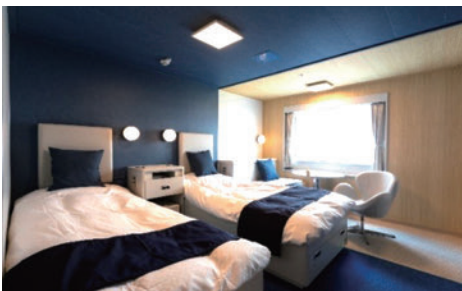
▲シースピカ (SEA SPICA)

特集

海事観光

3代目さるびあ丸就航

(東海汽船(株))



■貨客船「さるびあ丸」(3代目)
全長118m、幅17m、総トン数6,099トン、航海速力20ノット
国土交通省では、「さるびあ丸」の建造資金の一部を補助するなど、老朽化した船舶の更新を図るための支援を行っています。

東海汽船の新造客船3代目「さるびあ丸」(建造:三菱造船)が6月25日、東京~大島~神津島航路に初就航しました。船の大きさの目安となる総トン数は、2代目「さるびあ丸」(1992年就航)から1,080トンアップの6,099トンに生まれ変わりますが、環境に配慮したディーゼルエンジンと電動推進器を組み合わせたハイブリッド仕様を採用したことで、大型化と、11.3%の燃費改善を両立しています。

また、快適な船旅を提供するため、客室のバリアフリー化をはじめ、プライバシーにも配慮したつくりとなっています。

船体デザインは、本船のコンセプトでもある、「本土と島を結ぶ」ことをイメージした幾何学的な波模様を、伊豆諸島沖を流れる黒潮のような藍色「TOKYO アイランドブルー」で表現したカラーリングが特徴です。

旅客船事業者や船員の方々は、コロナウィルスの感染が拡大する中でも、感染症予防対策に十分配慮した上で、島民の生活に欠かせない移動手段として運航を継続してきました。

今後も船旅の楽しさや離島の素晴らしさを発見・体験させてくれることでしょう。

